

こん の ゆう
紺 野 祐

学位の種類 博士(教育学)

学位記番号 教博 第 43 号

学位授与年月日 平成11年12月22日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科(博士課程後期3年の課程)
教育学専攻

学位論文題目 マックス・シェーラーの人間形成論

論文審査委員 (主査)
助教授 笹 田 博 通 教授 沼 田 裕 之
教授 増 淵 幸 男
教授 加 藤 守 通
助教授 池 尾 恭 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、マックス・シェーラーの人間学的思想に定位しながら、行為としての教育のあり方と密接にかかわる人間形成の現象を究明することによって、教育哲学、さらには人間形成論を独自の視点から基礎づけようとしたものである。そのさい、(1)シェーラーの哲学的人間学が教育人間学の研究に新たなあり方を提示していること、(2)その問題設定が人間形成を基本とする人間存在を多角的に解明するものであること、(3)シェーラーの人間学的思索が実践的性格ないし現実的有効性(アクチュアリティ)をもそなえていること、の三点をめぐる論証が主な目的とされている。その内容は以下のとおりである。

本論文は10章から成っている。まず、序章「シェーラー研究と教育学の接点」では、哲学及び教育学における従来のシェーラー研究との対比で、本研究の目的及び構成が提示される。次いで、第1章「人間学的にみた人間形成論 — シェーラーの人間形成論的—教育学的意義 —」では、シェーラーの人間学的思想にそなわる人間形成論的な視点が、従来の教育人間学との立場的な相違の確認をとおして、人間学的にみた人間形成論というかたちで明示され、そこから、シェーラーの人間学的思索を基盤とした人間形成論、すなわち本研究そのものの成立根拠が言及される。

第2章から第4章までは、人間形成を遂行する人間存在の多様な側面をシェーラーの人間学的主題に即して重層的に解明している。まず、第2章「価値を認識する存在としての人間 — シェーラーの価値論にみる個性の形成について —」では、シェーラーの人間論における主題の一つが、価値を感得する情緒的人間という人間観をとおして設定され、そこから、人間存在における情緒的な価値認識の機能、その機能によって確証されうる個性の起源について検討される。次いで、第3章「人間における精神と生 — 精神と生の《調和》 —」では、シェーラーの人間論における第二の主題、精神と生の対立という人間学的現実の問題が取り上げられ、それを解決していく視点が、生を包括しうる精神的な自己認識、すなわち自覚という考え方をとおして追求される。そして、第4章「宗教的存在としての人間 — 《神的なもの》と自己形成 —」では、シェーラーの人間論における第三の主題が、人間存在の宗教的側面に着目することによって探究され、その結果、環境／世界／宇宙という重層的場所に住まう人間存在の重層的構造が解明される。

第5章及び第6章は、シェーラーの人間学的思想にそなわる現実的有効性を教育学的・人間形成論的な関心に基づいて摘出している。まず、第5章「人間形成の視点からみた《知》 — 人間における《忘我的な知》と精神 —」では、知の諸形態を統合する人間形成的知の意義が主題として取り上げられ、人間の自己認識の過程で実現されうる統合的な人間形成的知こそ、現代教育における知育の問題を解決していくうえで重要である、と主張される。次いで、第6章「人間形成における《能為》の意味 — シェーラーの倫理学にみる道徳的形成論 —」では、人間存在の事実性をふまえた道徳的形成の可能性が、シェーラーの倫理学的思想、とりわけ能為という考え方をとおして検討され、そこから、当為を中心とした徳目主義的な道徳教育を超える新たな視点が提示される。

第7章「シェーラーの人間形成論 — 「人格」の価値と《時の要求》 —」は、本論文のいわば総括的考察にあてられた部分であり、重層的場所に住まいつつそこに多元的価値を感得する人間、しかもそのさい自己存在の事実性をたえず基調とする人間、そうした人間の自己実現としての人間形成の現象が価値論的・存在論的に究明されることによって、人間学的にみた人間形成論の意義が全体的に確証される。そして、忘我的行為及び忘我的な知の只中で生じてくる時の要求こそが人間形成の究極的根拠である、と主張される。

第8章「人間学的にみた教育学の可能性 — シェーラーにおける人間形成と教育 —」では、人間学的にみた人間形成論という視点から、教育的関係ないし教育的行為の構造及び可能性について検討され、そこから、人間形成の現象にそなわる豊かさ及び深さが、シェーラーの人間学的思想に定位しつつ明らかにされる。そして終章「結論的考察と今後の課題」では、以上の各章で提示された結論が要約されるとともに、本論文の研究成果が、①シェーラー哲学の現実的有効性の人間形成論的検証、②新たな教育人間学研究の可能性に関する批判的考察、③人間学的な人間形成論による教育的行為の基礎づけといった研究目的との関連で吟味される。

論文審査結果の要旨

十九世紀以降、哲学から分化・独立した経験諸科学の急速な発展は、人間の本質に関する多くの新たな情報を提供することになったが、その一方で、人間理解の混乱ないし分裂という事態をもたらすことになった。こうした状況のなかで、個別的な経験諸科学の研究成果を十分にふまつつ、全体としての人間とは何かをあらためて問うたのが、いわゆる哲学的人間学であり、また1950年代後半より、哲学的人間学のこのような動向に触発されながら、教育学のカテゴリーを人間の全体的理解に関連づけようとしたのが、広義の教育人間学にほかならない。本論文は、教育人間学のこのような抱負に着目しつつも、教育人間学が教育的事象の意味を狭隘化している点を批判し、哲学的人間学の源流たるシェーラーの思想に立ち返ることで、教育的事象を広く人間形成という視点から多角的に究明し、これによって新たな教育人間学研究の可能性を提示している。その射程は、人間存在及び人間形成の成立根拠にかかわるさまざまな問題領域、すなわち価値認識と個性形成、精神と生との関係性、人間における宗教性、知育及び徳育の問題、教育的行為の可能性といったきわめて広汎な領域にわたるものである。

こうした研究は、これまでの教育哲学研究には見られない独創性を有している。教育学、とりわけ教育人間学に対するシェーラー哲学の意義については、わが国においてはもちろん、ドイツでもいまだほとんど原理的・全体的に研究されていないのが実状であり、この点で本論文は、教育哲学研究に対して多大な貢献をなすものであるといえる。

さて、本論文がそうであるように、いかなる教育論も展開していない哲学者を教育哲学的に研究する場合、回避されねばならないのは、その哲学思想をすでに完成されたひとつの体系として理解したうえで、それが提示する本質理論を教育的現実の諸問題に対して適用していく、ということである。なぜならば、教育的現実や教育的行為は世界一般・行為一般のたんなる現れではないからである。しかし、そうであるからといって、教育的現実とそこへの実践的関与という点にのみ研究を方向づけると、そこで取り扱われる哲学思想を恣意的に歪曲してしまう危険性がある。論者はみずからの教育哲学研究に伴うこのディレンマを克服しようと努めてはいる。しかし、それにもかかわらず、たとえばシェーラーの人間学的思想の現実的有効性を指摘するさいに、それを現代日本における教育諸問題と関連づけるなど、教育的現実に対する論者自身の関心や見解が過剰に先行している点も否定できない。こうした問題点があるとはいえ、シェーラーの諸著作及びその関連文献を精緻に探査・読解し、教育人間学の理論的な成立根拠を解明しようとした本論文は、全体としてみるならばきわめて意欲的な研究であるといえる。

教育的現象の多様化とこれに伴う教育諸科学の専門化、さらには加速度的に進行する教育荒廃の現実のなか、教育学のあり方と可能性がいまや根底から問われている。この点で、教育人間学をその新たな原理において基礎づけるとともに、教育的行為の成立根拠への視点をも提示する本論文は、教育哲学研究に新たな課題を提起するものとして高く評価できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。